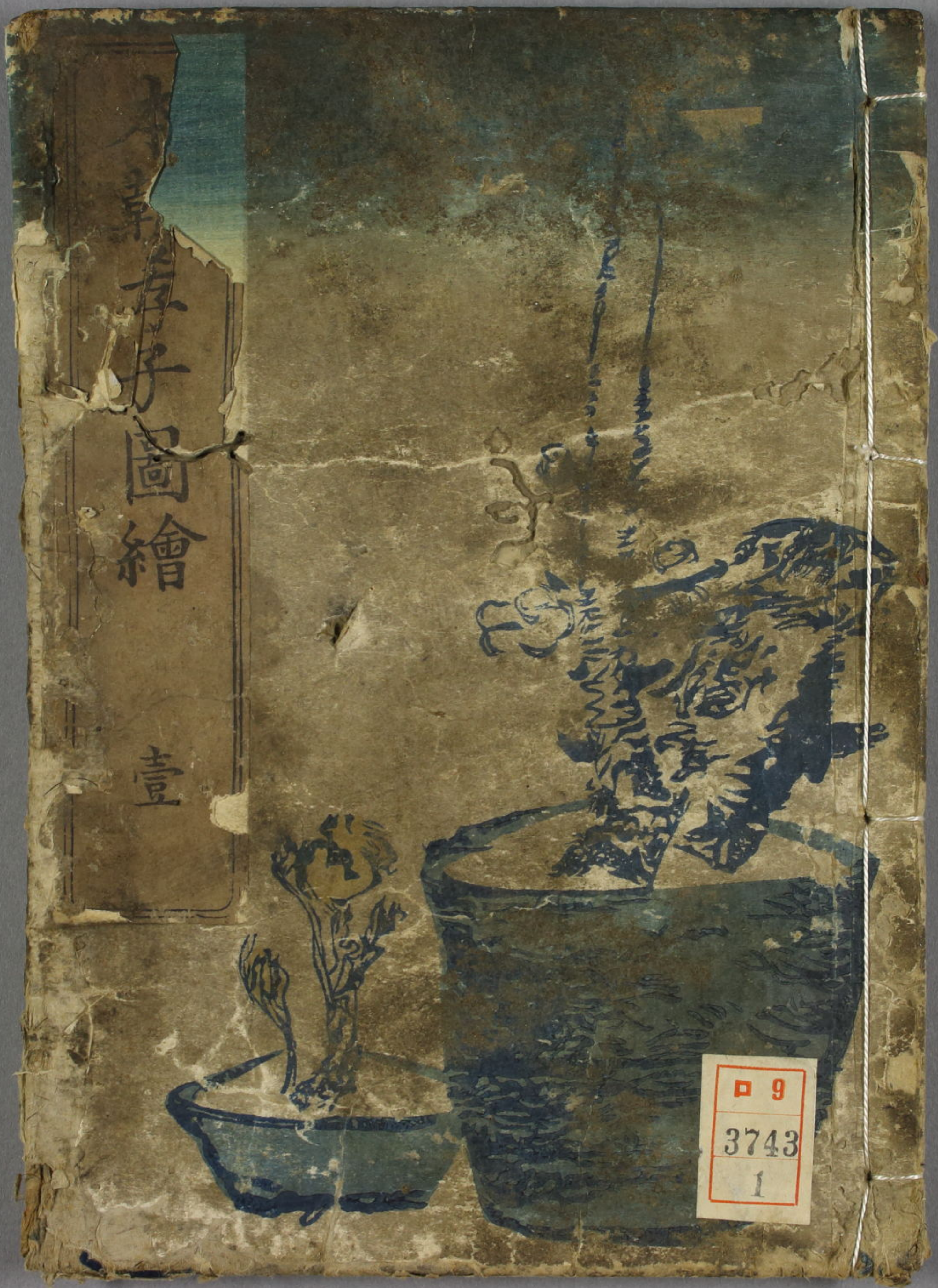




湯淺常山先生遺撰

本朝孝子圖繪

浪速書肆 寶文堂壽梓

本朝孝子圖會序

嘉十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

凡人之所行。有本有末。語曰。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其為仁之本與。蓋吾
自往昔。而孝子良民。不為不
多矣。予曾祖大文。軒嘗從聞
錄之。漸為卷帙。收在篋笥。有

年於茲。一日予友湯子誠者。
來謂予曰。吾嘗悲 藩之孝
子良民其行之湮沒而不稱。
今也集輯。欲以公之於四方。
聞子之先子嘗有其集。不識
有諸。予曰。有乃出以示子誠。
子誠於此又旁訪博求以增補

之。遂成篇凡五卷。名曰備前
孝子傳。蓋此集之行也。示吾
藩教化之所及。以上則輔翼
政教。以下則為仁之本與。遂
記其始末。以為之序云。

小原正路識

楠子息正行

楠多門兵衛橋ノ正成





平相國清盛入道



内大臣重盛卿

本朝孝子傳卷一目錄

- | | | | |
|----|----------|----|----------|
| 一 | 八木山淨慶 | 二 | 淨慈子八木左衛門 |
| 三 | 彼中柴本甚久 | 四 | 甚久曾孫甚久 |
| 五 | 牛窓廣瀬生安 | 六 | 同村里心三平 |
| 七 | 同村井上与左衛門 | 八 | 同村 安左衛門 |
| 九 | 同村傳三郎 | 十 | 同村 治左衛門 |
| 十一 | 同村清玄清 | 十二 | 同村 甚左衛門 |
| 十三 | 同村六左衛門 | 十四 | 同村六左衛門妻 |
| 十五 | 同村 甚左衛門 | 十六 | 同村 多左衛門 |

十七日村 小左衛門 大日小左衛門妻

十九日 浮良里心太希門 平日六希太希門妻

廿一日 不隼人 廿一日 不太郎希門

廿三日 不昌玄清 廿四日 不彰太希門

廿五日 浮良里心太希門 廿六日 里心其太希門

廿七日 里心七玄清 廿八日 浮良里心太希門 廿九日 浮良里心太希門

三十日 浮良里心太希門 三十一日 浮良里心太希門

三十二日 浮良里心太希門 三十三日 浮良里心太希門

本朝孝子傳卷一

一 八木山浄慶

和氣郡八木山村に生る浄慶と云ふ者、佛像を造る

事を業とせしが、親に侍ふるに孝行盡く、其志

甚篤なり。一、其長七年の時、

圓清公池田左衛門尉源 卿参議圓一名と云ふ大に感歎し

て、源に賞与あり、彼が田地の貢を世に免せ、

其威書に、一、賜ひを孝徳に、一、たまふ日十

八年に、云、薨し、せむと云ふに、源に歎と悲し

と、まより、まふと云ふ、白石に、云、この御像に

造りなりあむおれし其君と頼りなり志
ありとて浄交終りに終る遺言して我 君と
うけなりなりあむおれし其君と頼りなり志
汝等もあむ御像とありなりとて我 君と
ありとて人皆感あり

備前國和氣郡八本山村之内抱分田方二反
五畝畠方二反九畝一步都合五反二畝一步
依有孝親永代扶助候也依如件

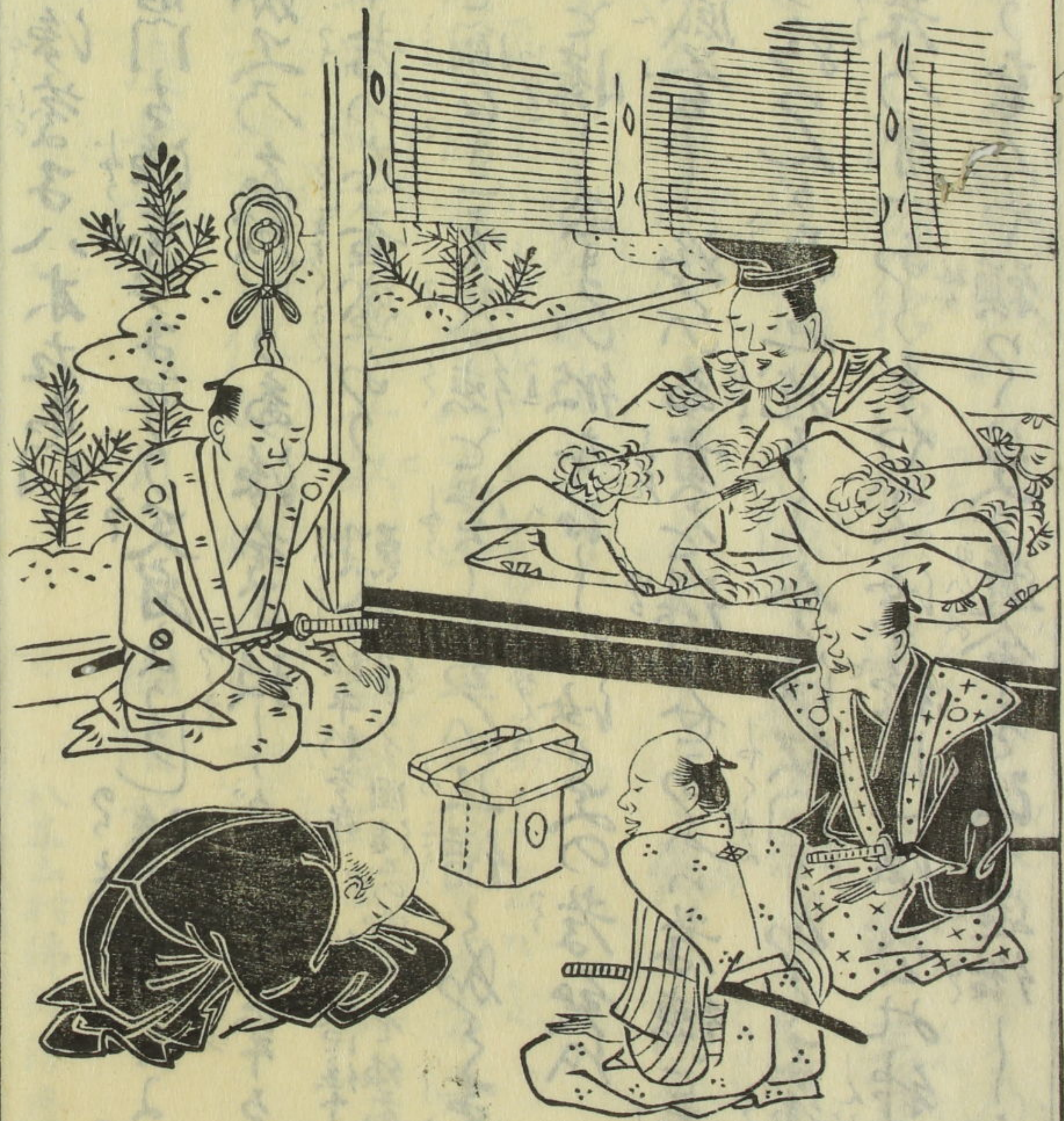
慶長七年十二月

國清公花押

八本山村佛作浄慶

二 浄交子八本山村

八本山村も浄交が子なり又身まうし其遺言に
世傳ふか父の志を盛なり 烈公 松平新を命 嗣君後には中あわ
其篤く孝の志を盛なり 烈公 松平新を命 嗣君後には中あわ
その志を盛なり 烈公 松平新を命 嗣君後には中あわ
ありとて人皆感あり



子孫を後け永く祀をふといふが本意と成るういあふ
うと懇まをうへとせ給へ大み罪を悔く速う
君命み後いなりうふ烈公御威乃のまりあわう孝
うりと賞うあひ烈八本在束門後善と改べうと仰わう
舊地の高六石餘乃とみ十二石の地を増し給うぬ
神像を八本山の中う祠成たて納めなりそよう世
子孫た束門と称しあけ神祠れ祭るとふさうう

備前國和氣郡八本山村之土民淨慶有孝行
之圖又能刻石造佛像其巧甚妙予祖父相公
威彼孝行免其家年貢課役以養父母相公

辭世之後、淨慶悲歎之餘、自造 相公之石像、朝夕禮拜、有子二人、命彼等曰、我蒙 國主之恩最厚、汝等為僧守護此石像、是我之所願也、二人之子即剃髮為僧、淨慶已死、長子亦号淨慶、能守護石像、亦事母有孝、年久、予憫彼等為出家之身、而無子孫之相續、竊石彼等、令告之曰、祖父相公免汝父之年貢課役、依有孝行之譽也、然、今汝等為僧、無子、是不孝之第一也、况又汝等死後、無子孫之守護石像者乎、願改過、还俗、子々孫々永守護石像、誠可謂達父之本意欽、淨慶大悔、前此曰、恭承 君命、嗚呼、德善之速、而有忠有孝、不可不加褒賞、仍令淨慶还俗、号八木左衛門、德善又舊地六石餘之上、加増十三石餘、前後之高都合二十石、永可為神像祭田者也、

萬治三年十月二十五日

烈公

花押

三 彼中紫本甚少

彼中淡江郡大崎村の内紫本、其甚少、兄弟等之令其甚少、生後、自然孝悌の強み、幼て父いそいそ母を養育せしめて、長く母を兄が如く、おぼしうた甚少、其成る志みよりて甚

みづかたのこころぬ其孝公乃添れたる夜いふとて床
をうつら母と寝させ已に枕の隙より居る母度入
ぎと自ら依さど母に秘むるが共う真くあらを
同ふかつるふけとば安んじあゆみいひむけとて
おたゆして懇くいひまう知れぬふたふた起茶を
煮て母の起ると結くともめをいたさ火にて煮込ふせ
がせ夏の蚊帳をつりまづとぼくち中に入あ蚊のあり
ふしを感して後母を秘させぬたましく園より出
りてはごうづ母乃好む所れ者ありふち厨の菓ふと調
て後己が利を毎どおにゆりていふとれはとめけり

兄農業みあうて儀を修るの地よりいふとぬ兄甚ふ
ふとるち我の親の慈めれたゆりあけき田をいふとれ
ハ耕作の力とせくせどもあきゆき汝も好田はあ
かきあり我こそ見あきば好田はゆづるといふもは汝が
田なりとあきけりいふとよ若わえきと汝と害せん
ふ甚ふとえきとふけきもふく我田をいふと
いふ見れ田乃悪きとてはる其年より大に実
ふと熟して見うけとて又いふて悪田といふ此
ゆへ未進ゆびしく力そぬ里にこれをせき甚ふと
倉の中み進へきとと甚ふ要るいふとす里にゆりて



涙をながし兄不肖に多難今に罹りて若輩を免
 したまふ米をもち来んとて歎きつらありとまねに二
 公めれ神あはれ里ふもこれ小感にて甚ふがなり救ふぬ
 甚ほびくゆりとふら他借多き米ををばくのり
 我ふかくぬれたる人を知りて我うたふと争ひ貸さる
 とり兄後みおれ破てより方なりけり甚ふ我回乃
 中をきて兄の田と名付自耘く兄と喜ひぬかくるは
 貞も人うされきく歟り時を過とど自ら利とをう
 けり多里ふりゆうせたり年く過米けりこれゆふ
 去み玉いり其る米を返しけりあるものあり懐抱

ふどもあつていづれもあつたことゝいふ甚々懐と人皆
称どあつた郡吏其の志を感へ米とつて賞
もいふ甚々あつた母をねて云々今いふと
いぬるも母うはるをいふ母もいふまことはい
賜物あつたやいと母の慈ありと一粒我の
はるど年老たまひつゝあ安樂よ書さす
くもいふ負つゝいふまこといふ米をいふ母乃
用に供へて母の好むを同く書いとせり母よ
い八旬う及ぶとおふる六旬餘と云ふ人を
うう若れつとわやい母乃云甚々が孝子然る

にうて今いふまで昔あつた何をいふ老あつた人國
母と仰ぎたまふも我いふと云ふわが
神め加護し給ふや同じ田代わが畠をいふ
をさうて常実と云ふ或年いふと云ふ
と植んと隣のお其のあつた若甚々今幸り
いふばとを植つゝあ病のうういふと云ふ
胡麻あつたいふと熟いぬ毛のあつた
皆利なり其年夏早い秋洪水いふと
あつた若の胡麻ととぐすを信濃人乃いふ
甚々が一言いふと一郷れ若貸借をいふけり

いあるる荒僻の民をみるがごとく一と賞せんこと
る中く云々にしてゆめ其の依り甚ふも
抑々ぬ者より多きこと皆其事とあけて其の若
るふまより只甚ふのこそを称するに例なり又ま
を福さむる今人の情なりたとい一村をて悉く
甚ふたふもより中よりいふ二の最甚ふが
孝悌なり異なりあるて大なるなる甚ふこれと
三十三歳あり也

備中。國淺に郡中大島柴本村。内抱分田方三
及畠二反都合五反依感有孝悌之行永代與

之素僻地之民雖不知有孝悌之教誠天質之
靈妙也哉郡中皆至稱其美是又天之靈也故
以天祿賞之者也

承応三年十二月十三日 烈公 花押

柴本村甚助

四 甚ふ曾孫甚ふ

初代乃孝子甚ふ六十歳少延宝九年の秋より
ぬ其子又の名を改く甚ふといふ天竺篤實あり
者あり八十歳少終りぬ孫も甚ふと改めて人あり
又う抑々ぬ篤實あり者といふ王父の風をうけ継て孝



慍^いなり母六十^むに^いま^いさ^いう^いあ^いは^いは^いう^いく^い其^いま^い小^い背^いが^いだ^い家^い
 貧^いし^いき^い者^いあ^いは^い母^い田^い地^いな^いど^い物^いあ^い業^いの^いた^いけ^いせん^いと^いあ^いが^い
 其^いあ^いろ^いじ^い又^い宵^いん^いを^い求^いめ^い風^い真^いく^い其^い事^いと^いく^い勸^いめ^い
 と^い母^いに^い家^いの^いう^いら^いし^いあ^い此^い用^いを^いふ^いて^いた^いま^いや^いと^いか^い然^い
 き^いお^い業^いと^いあ^いの^いと^いと^いく^い母^い乃^いを^いう^いと^いう^いい^いと^いあ^い物^いあ^いと^いい^いふ^い
 ら^いず^い又^いく^い母^いう^いと^い免^いれ^いる^いを^い盡^いく^いろ^いわ^いる^い年^いま^いま^いの^い
 比^い神^い廻^いを^いう^いろ^いあ^い母^いみ^いと^いめ^いん^いと^いあ^いひ^い玉^い子^いと^いあ^いる^い漆^いう^い
 乃^いて^い廻^いを^い求^いん^いと^いて^い其^い價^いと^いあ^い棄^いて^いる^いもの^い甚^いあ^い衣^い袴^い入^い
 さ^いし^いあ^いは^い價^いの^いま^いた^い神^い廻^いと^いり^いし^いむ^いべ^いと^い者^いも^いと^いあ^い
 と^い棄^いて^い河^い波^い屋^いと^いく^い若^い汝^いを^い行^いの^いり^いろ^いと^いて^いか^いく^い神^い

先考經政公俱稱譽之世遠人去鮮知其孝悌者遙尋其事狀深嘆賞之今曾孫甚介有遺風能養母愛姊弟故更與倉米賞之者也

延享二年七月二十二日 保國公判

日一十月廿六日 保國公甚介を後園の亭に召出さる汝代々孝悌乃志あるを深く感ぜらるる白根三枝下し給るぬ傳へてくみ出雲國小知者もあはれはるはるはを習へりや次ういひぬ 烈公乃甚介も賜へり文をよみ小書て教るありと今柴本

乃里も吾藩の支封信濃守政言和臣池の封地も属せしぬ寛保比和臣の郡吏封地を巡見せし時彼が家屋宅そこをいへるをえり 烈公の感書納めある家ふもば風雨のふりて木材乃樹木を賜りて新く建てることぞ

- 五 平窓末廣生安 六 庄屋三平
- 七 井上与左の 八 安左の
- 九 竹三郎 十 治左の
- 十一 清玄清 十二 甚左の
- 十三 六左の 十四 六左の妻
- 十五 森玄清 十六 ぬ左の



十七小太郎の妻

十八長太郎

十九六郎の妻

二十六郎の妻

二十一隼人

廿二太郎の妻

廿三右衛門

廿四新太郎

廿五小太郎の妻

廿六甚太郎

廿七七右衛門

寛文六年

烈公國中をえめぐせ七月十三日

邑久那牛窓村の民忠孝あり者二十三人を撰ひ

これと賞し

牛窓

末廣生安

醫術精入父教多令勸學之志漸成り云云
其の助めを蒙りて了は其家漸扶持十人常以自今醫
業精出學文治分根入下勸の

日村 庄屋三平

三年父治弟太夫云云治三年又其職云云
を起と桑河漢悦めり孫学術振中ぬを入懐意ふく
お勢るる者也

牛窓 井上与左郎

勸学講書神乃此奥家を希有者なり孫云云牛
窓の民俗た若く進はしむ社教之中改行云云

日村 安左郎

石の仕居と云ふと又教多お勢其上志み云云
彼思ふ孫や懐意おたもむく

日村 傳三郎

學問能お勢と云ふを云ふ兄と和感し衆を仕由
お勢と彼思ふ

日村 治左郎

速う眼を以て儒み帰し分ふゆづり音り極るゆと云
やうありし御大悦と云ふ孫云云

日村 清玄清

教養學う志あり高の侍りある人と教ふはに
物小おがしめ

日村 甚なる

六なる

母を告げ兄弟和睦し夫婦和して女房能姑に事へ
きき若かりしなり御威と云ふ

牛窓 六なる妻

まけ子めたと悲しと身をとりまをとり御威に思ふ

日村 甚なる

人ぐしにありあむ款あり理非と能きなり若かりし

あきより御威おがしめお務い

日村 ぬなる

学術をな入るる妻と若し入獄をよくはとん
学問も不暇より御威と云ふお務い

日村 小なる妻

えらぐいのまを告ぐ事始りたぐは其裁判をふ
ありより御威と云ふ

日村 長なる

教養若かりしなり御威に云ふ

日三十一日日那西行と歌なりせ給ひ

賞登一治人

西行上譯里

一希ちの

久く儒学を努め学郷の實とどなりて外に暇とど
其友もまづ全徳に順ひ又公用に必し重し多私ふ
片上乃仕居出りける余御威みとるに余を暇とど
あり依る時暇二つとるに又賣拂ふの田地はくのいきて
多しなり

右日人妻

又家れ富貴を忘さまり順て身と錢鄙に捨く事業
多しなり暇とどるに思ふに銀を扱ふ

右日人 隼人

神祇よりあゆを全知る余宮島に居てとる
余神意よりおのいひと御威みとるに依る時を人獄
よるはとる

日不 太希ちの

儒学をせりちり理直と名として勤仕暇らざる余
御威みとるに依る時暇二つとる

日不 若玄清

右日人

日不 新ちの

理を告と一老母みより云用不意奈御威
るる又老く女子不使みる一や一米二儀なり

伊本長門家来
小岩越ちの石仕

たけ

一母一女にて母老者の志深く孝れおみ不嫁仕の途
又身をまてて主人のゆとせうせう二飯一夜を
母へかけ又其孝を隣りあつたけが志御威なり
また其よりおめを子あふ思ひ依之母は五儀
毎身なり又たけが嫁を求めよと奉りよはれあり

其村黒心
甚ち

いまひと一き氏同にありて其風をまど自立く世と
と一あ公用みぬ孤妻一糸御威に思ひ付腹一ツなり

其村黒心
七玄湯

老母多身中風を候いなり
夜食湯茶七玄湯にいつとどい入と家父ととも看病
間漸減と隣村にたましく知る不奇特のありに思ひ
よりあ烏犀圓義義貫文なり

共 依中国西六条院村熱十布市女

依中国法に郡西六条院村熱十布市女とて兄弟あり
王くしあみふふたのびき方ありては村三布市



とふ者のあり方をよき毎月おれなすありこれより
て祖父數十帛が後にとりて耕種をいさるるをみそれより
三年と経ぬ祖父暫とたり祖父く又聲とふより是より
死よりまで八年が同想十帛兄弟其母と作り三人祖父
に事へあ孝ありき祖父切なり祖父は酒を好み又茶
とこのりや極めて貧しく是を求る事もあけきと
其労を忘し新と推く市に賣てち園公並園公とより愛
りしあ進みぬ若酒を愛ぶた價に盡くせんこれの時
ちあまふ借人にとりて祖父みとむとふつが人皆を孝
と感し速り貸つてぬも一度もわづらひあまふ今日ち

去産生ゆにふとふ多岡山笠岡りも酒屋にさぐるとい
 たいさあながひは和しるる気さあり茶もふあえどを
 うくむふしき日なり五月九十月乃極めていそがしき
 時もあせざれば農事ともあせざりき知々の食物も中ふ
 よろしとふとふ自ら祖笑うともあ替にふ食物など
 へひごふしぬきば母若成てを食せしむる人か
 めひごふしぬきば二便も自らこひあ赤子成る慈母れど
 とし其隣の若も孝かを極るあがたふあれどいふより
 にけうへきふといふあいといふ多きは病なりこれあを
 あふといふ多暑より日も必涼しとふに座にじあ或る

水もより汚いし細涼まで真しくて蚊帳あふなるけ
 きに例ふといふ多敷をゆいけり若成り出るあふも母
 母をきてゆたぬ母もあ敷十希に倍りくる祖乃餘命
 明日をもあふにけり事なるもい限るあふとふれ及
 きつてあふそふとふに戒めぬ祖又おくれにえり
 いはが孝か篤とふといふを事なり物皆むいあふ
 ふとふ後敷十希も妻をむく必孝なりあふとて候
 びあふり市女も又祖が足とつるめんあふ其あふに
 流いふし復い敷をゆい終夜臥しやふ市女後いあふ
 士のあふにはあふに結末あを身あ附と皆敷十希にふて

満ちてゐるが、盡さざるは、後十布妻と娶て
 妻みさじろふ、女も人乃生と付、あはれ答へて、母
 對て不孝をいふこと、何うも女と行、何れも盡さるべしとい
 う、たよりて妻も、孝なり、後十布家、主あはれ、あ
 を、つづく、謀るべきと、母も、公の、おなご、うん、の、や
 と、皆母、任せて、自、と、せど、後十布、を、い、田、畠、ま、つ
 いて、其、用、中、く、う、げ、と、い、ハ、身、が、同、祖、父、の、病、に、う、て
 耘、の、味、あ、ま、い、日、く、う、何、と、こ、そ、終、つ、じ、が、い、や、ま、い、に、田、地
 廣、ま、う、り、豈、天、に、あ、う、何、う、げ、や、女、も、い、か、く、こ、人、孝、公、の
 篤、き、ゆ、た、め、い、少、と、ま、あ、り

烈云、國、臣、母、も、子、小、も、日、く、倉、米、を、賜、り、て、其、至、孝、と
 賞、譽、し、終、り、承、応、の、末、乃、は、あ、り、

廿九 日 郡 西 大 崎 村 孫 十 布

西大崎村の氏孫十布と、ある老人、あ、い、あ、い、て、老、母、
 孝、わ、り、に、十、八、歳、少、い、て、又、み、な、る、は、十、に、及、ぶ、母、わ、り、け、る、が
 初、母、う、先、立、あ、起、ま、つ、う、母、を、勞、り、起、し、湯、と、は、じ
 め、水、を、お、て、う、づ、く、捧、げ、其、後、茶、を、煮、く、お、だ、く、も、
 め、粥、を、ま、け、て、別、う、味、は、け、そ、ち、我、子、み、も、何、え、ど、い、て、母、小
 の、こ、と、あ、あ、り、又、み、の、母、の、臥、床、を、妻、と、傳、り、お、て、い、孫、て
 安、う、ん、の、を、お、り、母、老、人、と、傳、り、事、と、こ、の、こ、と、い、り



あつひをいふ孫十希^と依^よみあつて昔^{いふ}今の物語^{ものがたり}りて母
 の寝入^{ねいり}をうめひく後^{のち}中^{なかつ}ぬ若^{わか}死^しりあつて何^{なん}も其^{その}ゆゑ
 りるをさへ先^{さき}にあつてし事^{こと}など語りさうせて母の心をふ
 ぐさありあつて家族^{かぞく}の若^{わか}に云^いうに隣^{となり}の人^{ひと}と母と
 同^{おな}じつゝ思^{おも}ひ、さうぬく茶^{ちや}をさめあつて孫^{そん}人^{にん}を
 いふなりとあつて孫^{そん}人^{にん}をさうさういふにさうとくあつ
 て孫^{そん}人^{にん}の出入^{でいり}がきもの也^{なり}人^{ひと}乃^{すなは}出入^{でいり}けき母^{はは}の心^{こころ}破^{やぶ}れ
 ん知^しるて老^{おい}くはさくふやう人^{ひと}といひ押^{おし}へあつ
 て孫^{そん}十^じ希^きと隣^{となり}ふと縁^{ゆかり}な母^{はは}結^{むす}まひ戸^との隙^{ひま}に出^でて孫^{そん}十^じ
 希^きが母^{はは}の結^{むす}孫^{そん}十^じ希^き必^{かならず}母^{はは}の葉^はふと持^もつて是^{こゝろ}に去^さる

とて母みとむし笠園をなすをけしむるなり
 といひ必着菓の類をくつゝ母乃て産とせり孫十希
 教ありり小分むしむいづるなりて其云ふ
 皆母り孝ありり兄みひと一母分むと我を賀のふ
 とれた母と馬みりた糸せ分むしと樂をとり孫十希に
 付たりて経たり母其ふれぬ一宿とる付必終てそと
 の公地いかりるはやいふる客夜やわふと熱うい
 てゆりぬ孫十希なり馬を飼ふ農事れぬわら母
 を糸せんがおり家み一人かくぬきべにや妻と孝
 小分た又終り分た兄を教ひぬるなり主人のおと
 其命と

うけあよくあさぐり兄と又れわらく母子おね
 むらむとむしを里れ人々も他人間て感ぜざるなり

三十 日郡小坂西村小六

小坂西村の氏小六次希女とて兄分あり王く
 といぬ小六老母より孝と盡しあり分長て田地を
 家をたうて別り一家乃農とふと田をまうり
 ああ己う香めりば然るみ小六が田より秀て秋
 分が田を實と小六あふ孤憂く分み地をうぬ母
 汝に我を孝へいふく好田分こそ作るべき地を
 うづらふ小六さうふきふく作ぬるなりあひそ
 うに智



うり枕と身がゆる田ん実らばさきと人乃湯失天のるを
 彼が身毎々裏て牛と賣物々の煙もいふまふ小六
 牛と求めしふふ貢足さば彼がなり假借一畜
 是くのいふより分る我化り仮借して是くのふるとあふ
 かようばびあうことをいふとに貢を捧げて分はる
 せど或身分いづく痛めるあり母我誤如金品羅に志願
 あり船乗るの費よく斗と云練まともさうざるを母一人
 遠の船乗るより恐びと小六もあさういふ彼官にありて志
 願のいふるもあさういふて分るまふは汝も奉若し
 となさうあり我も老極りて分るまふは惜ういふは汝が

